蛇笏賞作家鷹羽狩行の俳句
――第十五句集『十五峯』より――

太　田　かほり*

［要旨］鷹羽狩行の句集『十五峯』は俳句の世界で最も権威のある蛇笏賞を受賞した。俳句は日本の国民文芸としての広がりを見せ、俳句人口は800万から1500万と推定されている。鷹羽狩行はテレビ・ラジオ等を通して俳句の普及・啓蒙に大きく貢献してきた。山口誓子・秋元不死男に学び、伝統と現代の融合した句風をめざし、俳句一筋の人生を歩んできたが、本句集に至って独自の世界を構築し、円熟した境地を見せている。『十五峯』の特色を上げ、代表作および秀句についての解釈と鑑賞を試みる。

一、蛇笏賞・詩歌文学館賞ダブル受賞

平成18年7月に刊行の俳人鷹羽狩行の句集『十五峯』は、第42回蛇笏賞および第33回詩歌文学館賞の栄に輝いた。

蛇笏賞は、角川書店および角川源義とのつながりが濃かった俳人飯田蛇笏（明治18年～昭和37年）に因み、昭和42年に創設された。前年に発行された句集から最も優れた作品に与えられ、俳句の世界で最も権威ある賞とされている。今回の選考委員は、有馬朗人、宇多喜代子、大峯あきら、金子兜人の4人であった。

詩歌文学館賞は、年間に刊行された詩、短歌、俳句作品集の中から、それぞれ最も優れたものに贈る賞で、故井上靖名誉館長の提唱によって設けられ、現在では日本の詩歌文学における代表的な賞として定着している。選考は当館の振興会役員、評議員をはじめとする主要詩歌人、文芸誌編集者など約1,000名からのアンケートを参考に、各分野3名の選考委員が行う。今回の選考委員は岡田日郎、寺井谷子、山田弘子の3人であった。栄えある二つの賞のダブル受賞は、故中村苑子以来10年ぶり、2人目である。

鷹羽狩行は第5句集以来『五行』『七草』『八景』など、何番目の句集であるかを示す数字を入れた個性的な句集名をつけている。15番目の句集として『十五峯』という造語を使ったが、後にこの語には最高峰すなわちエベレストという意味があることが分かったということである。

＊非常勤講師／俳文学

俳句の一要素に「挨拶」性がある。自然、土地、人、出来事に因んで即興で詠むものである。鷹羽狩行は挨拶句の名手といわれ、平成 14 年、その名も『啓上』という贈答句（慶弔句）436 句をまとめた句集を上梓している。後書に「一句のかげに一人の人あり」と書いている通り、人生の折々の万感を込めた一句というものがある。自らの蛇笏賞と詩歌文学館賞のダブル受賞に際して、次の挨拶句を発表している。

虹二重頭を垂れてくぐりけり　　鷹羽狩行

鷹羽狩行は 1965 年 35 歳で第一句集『誕生』で俳人協会賞を受賞している。その後、句集『平遠』で芸術選奨文部大臣新人賞、句集『翼灯集』と『十三星』で毎日芸術賞を受賞。「毎日俳壇」や「東京新聞」俳句欄の選者。NHK 教育テレビ「俳句入門」「NHK 俳壇」講師、NHK 国際放送の俳句番組担当。国際俳句交流協会、日本文藝家協会、日本現代詩歌文学館振興会などの理事、俳人協会会長を兼務している。現在人気番組となっている NHK ラジオ深夜便「ラジオ歳時記」に出演中であり、国民文芸としての俳句の普及、また俳句を通して自然環境保護を呼びかけている。

このように第一句集『誕生』で輝かしいスタートを切って以来、順風満帆の俳句人生を歩んできた。二賞受賞に際して稲穂さながら頭を垂れる姿は日本人の心の鑑である。日本の風土が生んだ美しい姿勢は、庶民の文芸としての俳句によく似合う。

鷹羽狩行はかつて、〈虹かける神ややありてはづす神〉と詠んでいる。その神業をついに自らが見せたことになる。しかも、二つ。〈畦を違へて虹の根に行けざりし〉とも詠んだ少年の七十七歳にして至った華麗なる現在地である。「畦を違へて」から「虹二重」までの俳句一筋の道がくっきりと見えてくる。俳句人生の大舞台に懸けた二重の虹である。

二、蛇笏賞選考委員の選評要旨

次に蛇笏賞推薦理由を選考委員の四人の選評より要約する。（平成 20 年 6 月 20 日東京會舘にての蛇笏賞贈呈式会場で配布の資料より。）

1．円熟の境地――有馬朗人

①長年のトップランナーとしての活躍
②実作と論説と啓蒙の力
③放送や講演による俳句の普及
④俳句と人生が一本化した活動
⑤作品の円熟した美と強さ
⑥ウイットに富む作品

⑦感覚美
⑧具象性
⑨重量感
⑩一つの境地に達した句集

2．鷹羽流の山河――宇多喜代子
①物をもって対象の存在を際立たせるという即物具象の方法
②平明かつ深みをもって立っている句
③山口誓子や秋元不死男に学んだ後の鷹羽流ともいえる境地
④ゆったりとした深み

3．感覚美の名手――大峯あきら
①市民生活の中で出会う出来事の感覚的映像を鮮明な美のフォームにおいて呈示
②長い歳月にわたって保ちつづけ詩的感覚主義

4．率直に――金子兜太
①「戦後俳句」への反措定として果たした役割
②俳句界に安らぎを与えた形式主義
③俳句界の「女社会」化

以上、4 人の選考委員の挙げた推薦理由から俳句文化への貢献については除外し、狩行俳句の特徴を要約すると次の 4 項目にまとめられる。

1、詩的感覚
2、即物具象による創作方法
3、豊かなウイット
4、平明かつ重厚な句風

三、選考委員推薦句と狩行自選 15 句

1．選考委員選と作者自選が重なった句
選考委員が推薦理由の例句として上げた作品と狩行自選とが重なった 2 句について鑑賞を試みる。

年迎ふ山河それぞれ位置に就き　　（有馬朗人選、狩行自選）

新しい年を迎える緊張感を漂わせて山河がスタンバイしているかのようであるという見立てがおもしろい。位置に就くとは準備完了という状態である。山も河もいつもの場所にいつものごとく変わらずに在るが、そこに畏まって存在していると感じる心が新年を迎える心である。新年には新年らしく山も河も居住まいを正す。あるべきものがあるべき場所にきちんと在るということが新年には貴ばれる。年の初めは何もかもが初めの位置に就く。三百六十五日の間には一時的に場所を変えることがあるとしてもそこからスタートする。実際はそんなことはないが、人間の営みに倣って山河がそのように装っているという捉え方が新鮮である。いや、移動はしないまでも山も河も普段はくつろいだり暴れたりする。眠ったり笑ったりもすると古人も言っている。「位置に就く」という見立てが新年らしく独創性がある。

秋風や寄れば柱もわれに寄り　　（宇多喜代子選、狩行自選）

風が吹く。秋風が吹く。そぞろに淋しい風が渡る。仮に旅吟としよう。柱は寺のものとしよう。奈良は唐招提寺、そのエキゾチックなエンタシスならばなおよい。遠く異国唐天竺を、天平の昔を思う。秋風はそこから吹いてくるとしたい。風雪を経た柱の存在感を目で確かめ、美しさを心にとめ、響いてくるものを見つめる。目に触れ、肌に触れ、ふと柱に寄りかかる。旅のつれづれに生まれた時間の空白にもたれかかる。太くたくましく、歴史を刻んだ柱である。千年余を柱として存在し、その前の数百年を樹木として存在し、合わせて二千年余の命を保ってきた時間に寄りかかり、旅情に浸る。木の柱のほのかな温もりが肌に伝わってくる。木の肌から我が肌へ互いの体温が行き来する。抱かれるかのような安堵感が兆す。物としての柱が自分に情を示してくれるように感じる。旅の多い作者の定住漂泊の日常から旅吟としてみたが、一般家屋の柱を想定しても柱の素材、年輪、季節などから同様の鑑賞ができる。

2. 選考委員推薦の句

うしろ手に閉めし襖の山河かな　　（宇多喜代子選）

屋内の情景を詠んで戸外、それも山河の広がる大きな風景を描いた。広大な山河さながら襖に描かれた景色の中を歩き、次の間に描かれた新たな山河の中へとさらに歩を進めていく。開けた襖に描かれた山河と閉めた襖に描かれた山河がそれぞれの延長線上でつながり、開け閉ての動作によって一つの風景から別の風景へと場面が変わる。あるいは秋から冬への変化だったかもしれない。たった一歩、敷居一つで時間も空間も大きく転換する。屋内でも旅は続き、冬という閉ざされた季節にも縦横に心の旅が連続している。日本家屋にはこのような季節の味わ

い方があった。いや、日本の文化というものは、どこに身を置こうともいつも自然に包まれているという意識が培ってきたというべきか。襖という仕切りによって山河や季節の連続性が描かれた。閉めるという動作の中には微かながらも遮断した空間への心残りがあるだろう。うしろ手という手探りの動作は後にした空間への無意識の名残をとどめる。冬とは、襖を閉めるとは、そうした微妙で繊細な心理をはらんでいる。

道に出てひろがり帰る雛の客　　（宇多喜代子選）

宴の終わった後を描いて宴のさ中の楽しさを想像させる。祭は祭そのものやそのさ中ばかりを見るものだろうか、いや、活気に満ちた準備段階や終了後の寂しさにこそ見所があると言った兼好法師に同じく、余韻を引いて帰途に就く子供たちの様子から雛祭の華麗さや楽しさがいきいきと伝わってくる。道は広がって歩かないこと、二人以上は並ばないこと、列を乱さないこと、人には道を譲ること等など、沢山の約束事を常日頃言い聞かされて素直に守っている子供たちであるが、話の続きや話し足りなかったことを話したり楽しかったことを反芻するのに、いつものルールがどこかに行ってしまったのである。あれはどうだったわね、それはこうだったよね、等など口々に感想を言い合って、行儀よく一列に並んでなどいられない。道いっぱいに広がって歩いている。暇乞いをするまでは招待された晴れがましさに立ち居振る舞いなどのすべてにあれこれ気をつけて過ごしたのだろう。大人びた挨拶をする、お客扱いをされる、晴れ着を着ている、珍しい料理が出される等など、いつもと勝手が違って大人しく上品に振舞ったのだろう。楽しさの中の気疲れから開放された無邪気な振る舞いが描かれている。

戀の字の糸のもつるる試筆かな　　（宇多喜代子選）

新年になって初めて毛筆で字を書くこと、書初を「試筆」という。また、自作の詩歌を書くことにいう。狩行句といえばたちどころに〈葛の花むかしの恋は山河越え〉〈恋の身をしなやかに階下りて猫〉などが上がってくる。新年詠はどうか、あるある、〈歌かるた昔むかしの母の恋〉〈初夢をさしさはりなきところまで〉なども恋がらみの夢としたい。平仮名とてももつれるに違いない。

さて、二十三画という画数のとりわけ多い旧字体の「戀」の字であるが、「いとしいいとしいというこころ」と教わった。声に出してそう言いながら書けばこの字も難なく書ける。間違って「變しい變しい」と書いた御仁もいたやに。字の中に「糸」が一対になって組み込まれていて、字画は多いし糸のもつれのようにややこしい。実際、近松門左衛門の心中物の例を待つまでもなく恋の様相は多種多様、込み入って複雑、それがまた恋心を燃え立たせて周囲を巻き込んだりする。恋とはもつれにもつれるもののようである。戀の字を決まった紙幅の中に形よく大きくもなく小さくもなく、いや、やはり他よりは目立つように書かねばならない、一句の

中に用いてこの字が添え物になるようなことはあり得ない、だから、気取ってかっこよく、上品に雅に書きたい。否応なく意識させられてしまうこの字を他の文字同様に淡々と書けるようでは、たいした恋の句など詠めまい。経験があっての実作。思い起こせば千々に乱れる。自分の句に自分が高ぶってこその名句。大いに惑い、もつれにもつれる。恋の句に相応しく、書初めにも相応しい。

飾られて橙の色定まれり　　（有馬朗人選）

正月を迎える準備が進行し、大掃除も煤払いも完璧にし終わった座敷の床の間に鏡餅を据える。仕来りに則って飾りつけ、最後に一重ねの鏡餅の上に橙を置く。裏白の緑、輝くような餅の白さ、そして葉付の橙の鮮やかな色、色彩の取り合わせが清々しく、神聖な空間が生まれる。飾り付けて少し下がり、改めてまっすぐ正面から見ると、お飾りの橙はこのように映る。色彩学という領域からすると隣り合う色によってより鮮やかに映るという配色が解明されているのかもしれないが、もしそうだとしても、そのような分野が発達する以前から、人は自然界に存在する季節の色をさまざまに采配して正月にふさわしい世界を創造するという文化を編み出してきたのではないだろうか。あるいは、目の錯覚でも心の錯覚でもなく、然るべき位置に然るべき作法でもってことをなすと、ただの物、普通の物が最もそれらしく威厳さえ備わって別格の物に昇格するということだろうか。いや、それも文化というものだろう。橙の色が定まったと見る心に、新しい年の幸多いことが予感されただろう。

長生きか死に後れしか山椒魚　　（有馬朗人選）

〈山椒魚は悲しんだ〉で始まる井伏鱒二の小説を想起させ、その段階でユーモアと悲しみが交錯する。長生きはめでたく、死に後れは寂しい。世の中の現象は同じ状況を真反対に解釈することが可能な場合がある。幸福は視点を変えれば不幸にも見え、不幸せは取りようによっては幸せとも言えなくはない。このような場面設定が人の世には数限りなくあるものだが、どちらかの側に立てば逆の立場には不義理をすることになり、おいそれとはどちらとも断定できない。そこを山椒魚のこととしまえば苦情が殺到するという事態は免れる。いえ、水中の世界の話でしてね、今時の人間様の高齢化社会のことではゆめゆめありませんぞ、という具合に逸らすことができる。日本はまさしく高齢化社会に突入した。長生きか死に後れたかは身につまされる問題である。山椒魚に問いかけるかに見えてもやがてこれは自問自答となって戻ってくる。初め可笑しく、次第に自虐性を帯び、ついには相当に深刻な暗さを突きつける。よくよく考えればそうであるが、山椒魚にしたこと、一つの現象の裏表であるという真実、滑稽味などによってナイフで刺すような痛みからは遠く、さりとてやはりかなり胸に刺さる句である。

初鶏や雨戸にむかし節の穴　　（有馬朗人選）

漆黒の闇を引き裂くかのように一際高らかに鶏鳴が響き渡る。火のように鋭く鮮やかな一声である。地面から天に向かって真っ直ぐに伸びていくかのようでいて水平方向にも伝播していくような新年初の命の声である。まだ暗く闇に閉ざされているはずなのだが、鶏の羽毛の白さ、鶏冠の赤さが浮かび上がってくる。視覚に聴覚に響いてくる。屋内はまだまだ暗闇である。鶏鳴を合図にしだいに薄闇へと変化し、ある一瞬、一筋の光が真っ直ぐに差し込んでくる。小さな穴から細く鋭く部屋を貫く。初日の光である。まず目に、そして、心に、神々しく差し込む。とりわけまぶしく映る。この句は上五の「初鶏や」で切れる。初鶏から初日へと正月らしく格調高く自然な連想を誘っておいて、一転、中七下五で俗に転じる。その呼吸の見事さ。格式と卑俗の組合せの妙。初日の光が雨戸の節穴から差し込んだものだと種明かしされて一気に現実的になるのだが、作者は読者を単に現在地にはとどめおかず更に「むかし」へと拉し去る。そして再び昔ゆえの心の雅の世界へと誘う。新年正月はある意味で時間の旅をする期間である。過ぎた日々、迎える未来の双方向に心を遊ばせる時間が正月ではないだろうか。

さて、雨戸であるが、今風の日本家屋ではアルミサッシが主流であるが、「むかし」、といってもついこの間まで雨戸といえば木に決まっていた。雨戸には線や波型の木目模様があってどの戸の隣にはどの戸が来るという順序が何となく頭に入っていた。何番目の戸はぎくしゃくして開け閉てにはコツが要るなどと一家で共有する情報があった。朝は雨戸の彼方からやって来た。夜は雨戸を閉め切った時に始まった。その名の通り雨風を防ぐ道具であり、心理的には防犯という役目も大きい。時代劇などの押し込み強盗は派手に雨戸を蹴破って侵入してくる。もろもろから守るという任を担った雨戸にして、ところどころ節穴があるのが時代の大らかさというか、素材の面白さというか、指を突っ込んだり外を覗ったり遊び心を誘われた。完璧に遮断してしまうアルミサッシにはない温もりや親しみや面白さがあって、毎朝毎夕の開け閉ては一種のゲームのような要素もあった。昔は自然も人心も今ほど過激ではなかったということか。節穴から一筋斜めに差し込んだ光の何と明るかったことか。美しい見ものであった。節穴が大きかったりするとちょうどスポットライトがあたったようだった。舞い上がった埃に光が当たってキラキラと輝くのも美しかった。屋内にいながら外界とつながり、朝を迎えた戸外の様子が推し量られた。まだ床の中にいながらにして眺めたこのような光景が人の心に何かしらを育んだのではないだろうか。雨戸は雨音や風音はじめ戸外の音をワンクッションおいて屋内の人々の耳にもたらし、人々の想像力を磨いていった。作者の俳人らしい感性を磨いたのは雨戸の節穴のようなものではなかっただろうか。

一枚の音を加へし朴落葉　　（有馬朗人選）

かさりと音が落ちる。音が溜まる。その上にまた一つ落ちて音がうち重なる。音が嵩張り、

音が山をなす。一枚また一枚と朴の葉が枝を離れ、翻りながら個々の飛行距離を落下する。着地までの時間を最大限に引き延ばして楽しむかのような一葉もあれば、最短距離を木訥に墜落するものも、潔い落下ぶりを見せるものもあって、それぞれの落下の様子がその音によって察せられる。着地してさらに吹かれてさ迷う一葉の音も混じる。視覚的な場面を聴覚でとらえ、聴覚の澄み、心の澄みをうかがわせる。辺りの静寂さが一枚の音を大音声に拡大する。

朴の葉は大きい。目立って大きく、見つけると拾い、手に取ってしばし弄ぶ。天狗の団扇のように扇いでみたり、何かの代用にしたいと考えるが、古歌のように「旅にしあれば」木の葉に飯を盛るなどということには至らない。用には立たないが何故か心ひかれる。女児のままごと遊びには色彩的に不向きであるが、大人にはこの渋さが究極の味わいとなる。この色が発する音と音が重なるのだからこの上もなく渋く深く心にこだまする。加わった音一つで天下の季節の極まりをはっきりと確認する。

温帯に生育する広葉樹の中でも朴の葉は、大きさも重さも他よりも大きく重い方に分類される。朴の他に何の樹木が同類に分類されるかと探しても、すぐには当てはまるものを思い出せないような特徴をもつ。その形は自然というより人間の作り物のように芸術的である。芸術的といえばどんなささやかな一葉も優れて造形的ではあるが、紅葉や銀杏の繊細さもさることながら、朴落葉の趣には一際心引かれるものがある。この句はそれが「音」によって把握されている。「一枚の音を加へ」る度に思索が深まっていく。そんな句である。

四、鷹羽狩行自選句とその特徴

俳句において「自選」は極めて重要な作業である。自分の作品を自分で選ぶことをいうが、他人の作品を選ぶ場合に働く選句眼が自分の句に対しても機能するかどうか、ここに本物の目が試されることになる。作家自らが選句眼の鍛錬を説き、多くの先人もそれを重要視してきた。句集全 437 句中の自選 15 句を中心に、選考委員の挙げた狩行俳句の特徴に従って分類し、併せて鑑賞を試みる。

1．感覚美に優れた作品

露の夜や星を結べば鳥けもの

秋は空気も空も澄み渡り、星が一段と美しく眺められる。天の川、星祭り、流星など、星にかかわる季語は概ね秋とされる。空気が冷えると露が降りる。外気がひんやりと感じられ、しっとりと夜気が漂う頃の星空は、仰いで飽きず、星が描く数々の物語に夜長のロマンは限りなく広がっていく。「星を結べば」とは星座を見つけること。星と星を線でつないで動物や人や物の形になぞらえ、名前をつける。歪んだ四角形のこうま座、「へ」の字を裏返した形のおひ

つじ座、ギザギザ形のとかげ座、大きな逆三角形のやぎ座、地平線ぎりぎりに現れるつる座等など、言われて見れば鳥や獣の形に見立てたものが多い。夏の十字形の白鳥座は最も見つけやすい星座である。それらは神話や伝説をもつ。星の位置によって時刻や方角や季節を知ったという古代人の科学的なものの見方に感心し、神話など豊かな空想力に魅了される。古代のギリシヤや中国の人々が星座を組んで物語を作ったのに倣って、今宵、作者も星と星を線で結んで天上に壮大な絵を描いてみたのである。そして、しだいに、自ら創作した天上界の物語の中に没入していく。

天上に星、地上に露。どちらも一粒ずつきらきらと輝く。はかない露と永遠の星。露という言葉にも露そのものにも身も心も潤う。肌で感じ、心で感じ、それぞれが自らの人生に引き付けて露を解釈する。しっとりと心身を潤すものであり、しみじみとした思いを誘うものであり、最終的には古人が磨きあげてきた「あはれ」という美に至らせる。この句は上五できっぱりと切れる。「露の夜や」と詠嘆する時、この世の喜怒哀楽、人である故のもろもろ、それらは誰の場合も一言では言い得ない複雑さをはらんだ無限の感情を伴うが、それらをことごとく受容しつつ、別天地の星空へと心を解き放つ。地上を覆い尽くした露と、空を覆い尽くせない星と、この隔たりの中で心理的均衡を保つ姿が想像される。

返り花たれのひそみにならひしや

春ならぬ冬、時ならぬ季節、狂い咲く一輪。桜である。山桜の返り花、それも吉野の桜。あの吉野のあの桜であることがこの句の味わいを無上のものにする。「あの」とは山・谷の美しさ、神武天皇以来の歴史の舞台、史跡も多く、桜の名所、由緒ある土地柄、一つの文化を形成した場所としての吉野山のことである。季節を違えたことへの恥じらいを潜めて楚々と、しかも凛然と、目立たず、目立つ、そのような風情で咲く一輪にしらずしらず惹かれていく。返り花は桜がよい。あり得ない環境においても桜ばかりはその個性が際立つからである。桜の一輪から、ひとひらの花びらから、日本人ならば誰でもたちまち日本の心を重ねることができる。「たれのひそみにならひしや」と独りごつかのような優しい響きは読者の回想を歴史の彼方へと促す。例えば静御前。いや、女人とすることはない。判官贔屓という感情が育くんできた悲劇の貴種源義経の凛々しさを重ねるのもよいだろう。生い立ちの哀れや悲運の生涯が返り花によく合う。「顰に倣ふ」は「真似をする」意。花がとある人物の面差しを真似るかのような雰囲気で咲く。顔立ちばかりかその生涯を彷彿とさせるような風情で咲く。その生き方を偲ばせて奥ゆかしい。普通の人ではない。波乱の中でも花の命を張った人物に絞られる。冬という季節に逆らって咲く抵抗の精神が一段と美しくする。やはり静御前か源義経になるだろうか。吉野の桜の返り花に限定して鑑賞を試みたが、もちろん、日本の各地に咲く返り花一般としてもよい。その土地ゆかりの人物を重ね合わせて鑑賞させる幅が句の奥行きとなる。

紋といふ花を咲かせて水の秋

水面に広がる波紋の虜になって飽かず眺めた記憶は誰にもあるだろう。一点を起点として小さく大きく、ある場合は静かに、ある場合は躍動しながら、彼方へと波が紋を描いて伝播していく。際限なく続くようで次第に収まり、大小の刺激で新しい波紋が広がり、また収まっていく。何かの作動によって機械的に起こることもあれば、石を投げるなどの行為によって起こることもある。不思議な模様である。等間隔にまたは規則的に広がっていく。その範囲は視界の及ぶ限りにわたり、そのスピードと距離と秩序に魅せられる。秋はすべてが澄み渡る。空気が澄み、空が澄み、水が澄む。「水澄む」という季語を作り出した日本人の感性はすばらしい。一掬の水に秋を感じ、一面の水に澄む秋を感じるという感性を果たしてどこの民族が育て得ただろうか。その水澄む季節の爽秋の風物の一つとして水の上に「紋といふ花」を咲かせた。あの幾何学的な水の模様すなわち波紋を花と見立てた。水の上にも花が咲くという季節の発見、創造もすばらしい。

2. 即物具象による作品

蝶生まれ翅をひらきぬ西東

蛹から蝶へ、世に脱皮といわれる華麗なる変身の瞬間をスローモーションで見ているような臨場感がある。自然科学の観察場面に立ち会ったかのように即物的である。同時に、詩画集をひもとくような雰囲気がある。つまり、自然科学の目が捉えた正確さと詩人の目が捉えた芸術性の双方の要素が融合した句ということがいえる。また、「西東」には宇宙への広がりが捉えられており、さらに、哲学的な思索へといざなわれるような深さがある。蝶という一点を描き、蝶を生ましめた天地すなわち広大な宇宙を背景画のように描く。「西東」の境目になる一点に瑞々しくも美しい命が誕生する。その一点が西と東の繋ぎ目となり、そこより宇宙が始まる。宇宙の原点に生まれた蝶が象徴性をもち、命の瑞々しさ、命を育む春の偉大さを伝えている。小さくも確かな存在の蝶と西東という日常語が結びついて宇宙規模の大きな世界が描かれた。

たかんなの短刀反りに出でしかな

竹の特徴は鋭さとしなやかさにある。竹の一生の中では筍はいわば双葉の時期であるが地面に出てきたばかりで既に芳しく、「短刀反り」という造語に竹の全体像が凝縮されている。優れた見立てであり、目に見える外観と内に潜ませた性質の両面が具象性をもって描かれている。二等辺三角形を思わせる生真面目な筍以上に斜に構えた曲り物の方が竹らしく、面白みもある。いわば亜流を描いて実は本流を描いたような点、一本の個性にとどまらず竹のすべてに備わっ

た一般性を掴んでいる点がこの句の鋭さである。成長した竹には精神性のようなものを感じるが、筍には子供や愛玩動物に対するような感情がわいてくる。獣の皮のようなものをまとっていて他の植物には抱かない親しみやすさがある。この句の筍は少し悪戯っ気があって兄というより弟のような、後から生まれてきて兄に負けまいと自己主張するかのような愛すべきキャラクターを思わせる。

海へやや曲がりて聳え鷹柱

気候変動や時代の流れによって季語の中には消えた物や消えゆく物、地域性などによって容易に目にできない物が少なくない。例えば、しみじみとした秋の趣きを感じさせた雁の列などは環境の変化によって姿を消した一つである。鷹柱はそこに行けば見られるというものではなく、場所や気象などの条件が揃わなければ叶わない季節の風物である。鷹が縦に群れて気流を捉えて空高く上がろうとして旋回する様子が柱のように見えるところから鷹柱と呼ばれている。十、百、千の単位の鷹が同じ向きになって旋回し、ある高さになると羽ばたきを止めて滑空に入り、高度が下がるとまた羽ばたきをして旋回に移る。そして、やがて柱状を解いていく。この句は、まず、飛ぶ空間を空から「海へ」と捉えて鷹柱の背景を空も海も取り込んだ宇宙全体であるかのように拡大し、生物の大いなる習性やその未知数を捉えた。さらに、鷹柱の螺旋形が「やや曲りて聳え」ていると観察し、よりリアルに実況中継するかのように描いている。青い空、青い海、そして緑、その広々とした舞台に生き物が見せる幾何学的でダイナミックな動きを描き、読者の目に鮮明な映像を結ばせる。滅びゆく運命の季語、容易には見られない季語が自然界の感動を記録し伝えるという偉大な使命を負っているということを改めて感じさせられる。

ひとひとりいれ歩きだす春日傘

春昼のミステリーである。春の昼間にはちょっとした異変が起こる。「歩きだす」のは日傘であり、日傘がまるで意図的に用意された車ででもあるかのように女人を拉し去る。「ひと」より「春日傘」の印象が強く、人が現れる前に既に日傘があり、人は後から登場するかのように錯覚させる。人の姿は物陰から傘の下へ一瞬だけ見えてすぐに隠れる。現実には女性がパラソルを開いて歩き出したのであるが、春昼のとある印象を、それは異変など起り得ない、完璧に平穏であるという安全を前提に一瞬の錯覚を描く。白昼夢のようでありながら実体を持つ「ひとひとり」を一瞬かいま見せるというテクニックは、推理小説の冒頭の場面に重要人物を登場させるのに似た効果があって、かえってその姿を鮮明にする。夜目遠目傘のうちということではないが定かに見せない故に読者の想像は美しく女人を描く。ミステリー性は「ひとり」にもある。日傘は相合傘になるということはなく、ことさら「ひとり」というあたりが物語の

伏線らしく込み入っている。作者は「ひとひとり」を何も不思議が起こり得ない天気のよい春の真昼に登場させる。そして何も筋を描かない。目線は上から下へ、高みから見下ろしたかっこうで、傘の下にすっぽりと隠し、ただ傘の円形だけを移動させ、読者の目もそれに従って移動させていくという手法をとる。また、ミステリー性を演出する方法として平仮名を多用した。漢字は意味を持つため、一文字一文字が意味を持たない平仮名に分解して暗号化することにより、謎で包んだ。読者は平仮名一字ずつを寄せ集めて「人一人」と解読する。何事もない春の昼日中のアンニュイな感じを描いている。

考へるかたちに二つ夜の胡桃

胡桃の形状は理科室の標本や図鑑などで見る人体の脳に似ている。色といい、皺のような表皮の入組んだ模様といい、他には連想が及ばない。それが机上に二つ転がっている場面を想像すると、単純化された人間の思考の形に見えてくる。思考に形があるものか。胡桃も思考するものか。団栗やひょんの実など仮に他の木の実に置き換えてみるが、賢そうな感じのする物はあまりないことに気づく。胡桃すなわち「考へるかたち」という発想は奇妙で独創的でおもしろい見方である。角度を違えて観察するとこうなるものか。木の実には愛らしく綺麗な物が多いが、胡桃は可愛くも美しくもなく地味で固く食指は動かない。そんな胡桃だから子供のままごと遊びにも加わることがなく、どこからどう眺め透かしても馴染みにくい雰囲気がある。ころりとあるいはごつんと机上にある光景は哲人が無言の思索に耽っているかに見える。「二つ」というのがよい。知恵は複数に軍配が上がる。深めるにも極めるにも単数には限度があるが、複数には倍へ、さらに累乗倍へという可能性があって、「考へる」という発想に適っている。また、「夜の」がよい。思考は昼にもまして夜に育まれる。秋の夜長に胡桃の哲人が長い思索に耽っているその静けさがイメージされてくる。

3. ウイットに富んだ作品

青蜜柑島がそろそろ重くなる

おもしろい。幼子と会話をするような楽しさがある。民話の始まりのように連想が広がっていく。蜜柑は海に面した暖かな土地によく育つ。例えば伊豆や瀬戸内のような所、この句は「尾道」の前書きがある。尾道は坂道が多く、少し坂を上ると大小の島や船を浮かべた海が眺められる。この句がおもしろくて楽しくて民話的な連想を広げるのは、「そろそろ」という話言葉による。俳句は文語で表記するという習慣を破ったところに新鮮な世界が生まれた。「そろそろ重くなる」は島人への挨拶であるが、収穫を待つ蜜柑農家の日常会話のようでもある。土地の人々の話し声が聞こえてきそうである。軽妙な味わいがあるが、初めて見たり訪れたり

する土地ではこの軽みは出ないだろう。尾道は作者の故郷であり、その懐かしさや親しみから挨拶をするように口語表現が出てきたものだろう。おもしろさは、「島が重くなる」という捉え方にもある。蜜柑が実って枝が重くなるというべきところを島を浮かべた海の側に立ったかのようにいってみた。船に荷を積めば重くなるが、島も青蜜柑のずしりとした手応えの季節を迎えて日増しに重量が加わってくると道化た。蜜柑の生育にしたがって島が重量を増やしていく。おとぎ話のような発想である。青い実が目立ち始めるにつれて枝が撓い、ずしりと重い景色になっていく。すっかり色づくと蜜柑の暖色はかえって軽やかに感じられるだろう。季節を巻き戻して白く香りのよい花が一面に咲く頃を思い浮かべてみると、あの懐かしい歌がひとりでに口ずさまれて、軽やかな景色が広がってくる。「海は大よろこび、重たい重たいと体を揺すって大波小波を起こしたとさ」などと続けたい。

4. 平明かつ深みのある句

鉦叩けふのこころの火を落とす

秋の夜、鈴虫はリンリン、松虫はチンチロリン、轡虫はガチャガチャ、馬追はスイッチョンなどとそれぞれ個性的な声で一夜を鳴き通す。そのような歌からの知識と実際の経験によって鳴き声と名前が一致している虫は多いが、戸外の闇の奥からチ―ンチーンと正確な間を置いて聞こえてくる虫の音が鉦叩であると納得した時の感動は忘れられない。初め仏間から聞こえてくるのかと思ったのは一つ二つと数えたくなるような間合いの絶妙さ故であっただろうか。物語などを読んでいたためか、物語の続きのような現実離れしているようでいて妙に仏壇の鉦の音に似ていて異界の澄んだ音のように感じた。あれは鉦叩だよと誰に教えられたのでもないが、古典の中のしんみりとした場面に登場し、その名と雰囲気から心にとめていたためか、ほとんど確信を持ってあれは鉦叩の鳴き声だと思った。それほどその名はその音を表していた。鉦は多くは祭事に用いられる楽器であるが、読経の区切りに叩く鈴に重なってどことなく他の虫の音に勝ってしんみりと聞こえる。規則的に意図的に立てる音のようで何かメッセージが託されているかのように聞いてしまう。単なる虫の習性のなせる技としても何とも人間くさく、ある意味で罪な虫である。その響きはより深い物思いを誘う。人の亡き後や人を恋う時など、ことに心に染み入る。そのように鉦叩は人をして己の心に向かい合わせる。そんな鉦叩の印象が見事に一句で示され、改めて筆者の独りよがりな鉦叩観ではなかったと思ったことである。

「火を落とす」とは竈や風呂の火を消すことをいうが、一日の仕事仕舞をする意味にも使われる。日中の活動を中止して夜の休息、就寝へと向かう前のけじめの一事として行う。すでにあたりに人の気配はない。ひとり灯していた灯火を消し、心にも点していた火を落とす。「消す」と「落とす」の違いを味わいたい。「火を落とす」という慣用的な言い回しからはひとり静かに一日の「火」を巡っての労働を振り返り、自らの営みへのいとおしみを明日にもつなげ

ようとする心の様子が感じられる。そこに事務的にキリをつけて仕舞にする時には生じない豊かな時間が流れていく。満たされた一日であったことがうかがえる。「心の火」とすることによって活動の内容に一段と精神が作用しているように感じられる。理知的、理論的に処理すべき仕事においても「心の火」の点す余地はあろう。生産的な活動であれ、非生産的な思索であれ、火は火、火は熱く燃える。燃えているものに水をさして一端消すことは致命的な中断ではない。火を落とす時、誰も明日を信じている。明日もまた火を入れることを予定して行う。火を落とす時の静かな一時を引き伸ばすとこのようなことになろうか。

五、秀句を拾う

俳句の選は難しい。高浜虚子は「選句は創作なり」と言い、創作と選句が同列であることを説いている。名句は選句という他者の目を経て始めて世に知られる。初心者はそのレベルにあった句を選ぶと言われる。句会では誰も選ばなかった句が最後に主宰から特選に選ばれるということが起る。選句力を磨くことが創作にもつながる。蛇笏賞選者はじめ多くの読者が見過ごした中にも秀句は交じっているだろう。『十五峯』は 3 年間に発表した中から自選したものを句集に収めたものであるが、次に上げる句は、発表当時から筆者が注目した作品である。

更衣こころの山河ひとつ越え

心にも山河があるとした点がまず新鮮である。さらに、その山河は固定した風景ではなく越えゆく山河であるとした所が独創的である。現実の山河を越えることにも、比喩としての山河を越えることにも、気力や体力などのエネルギーが要る。心の山河は清々しいものでありたい。その願望に更衣の心がよく合う。心の中にも風景がある。春の気分に占められていたものが更衣をすることで夏へと入れ替えたのである。ちょうど、山を越えるように、河を渡るように。山を越え河を渡ることは自分が身を置く環境を変化させることである。それが地理的距離的空間的変化であるのに対して、実際の心は春から夏へと時間軸をすべらせたのであるから、季節の変化を自らが行ったことになる。肉体は動くことによって変化させることが可能であるが、心は空間移動を伴わずに動かすことができる。心が動くとはすなわち感動することである。更衣によって新しい季節の到来を感じた。山河を一つ越えるほどの清々しさと達成感がもたらされた。春の心は征服する、乗り越えるという挑戦的なものではないが、春たけなわのけだるさや春愁などは少し重く、それをさっぱり払拭して命漲る夏へと乗り込んだ少しばかり得意な気持ちである。

流るるを忘るるまでに水澄めり

流れるのは水、水は流れる性をもって水たる証となるのだが、水そのものが自らの性を忘れて流れることを忘れる。外界を覆い尽くした爽秋の気配が自然界を代表する水の動きまでも封じてしまった。実際には、ものみな澄み渡る秋に身を置く人間のその目が水の流れている様子を錯覚したということであるが、擬人化や主体を交錯させるなどの表現上の技巧を感じさせない。古語であることを除けば使った言葉の日常性が句の世界をおし広げ、誰にも受け入れやすい名句にしたといえる。

「流る」「忘る」は〈れ・れ・る・るる・るれ・れよ〉とラ行下二段に語尾変化する動詞である。ラ行音の軽快な響きと繰り返しが秋の澄んだ水の流れを耳に再現し、映像の効果音のようにリズミカルに働いている。映像は初め例えば静止した湖面のような場面を映し出し、徐々にクローズアップしてそこが湖ではなく清らかに流れている川であることを種明かしする。せせらぎというより大河だろう。面となり帯となって大きな一枚の水がゆったりと流れれば視覚は流れを止めたように認識するだろう。その錯覚が「水澄む秋」の仕業であることに気づき、季節の大いなる力に感動を新たにする。まさに金を打ちのべて箔にしたような一句である。

朝顔の百花咲かせて驕らざる

秀吉と利休のエピソードもあるが、朝顔は、やはり、数が勝負ではないかと思う。一つや二つ咲いたのよりは十ほども咲いたほうが十倍うれしい。幾つ咲いたかを数えるのは朝の楽しみである。毎日同じくらいの数が咲き、萎み、翌日はまた同じ数が咲くところに夏の活力が感じられて暑い暑い昼日中を乗り切れる。百という数は無数を表す。数え切れない数の花が咲く。朝毎に咲く。一つ二つから次第に数を増やし、十指に足らなくなり、どんどん増えて来る日も来る日もしばらく一面に咲く。たった一日の、朝の短い時間だけの、花の命である。うっかり見ず仕舞という朝もある。そうした朝顔の価値を主は知っている。槿花一朝の夢の故事の通り、百の命、百花の美が一瞬で尽きる。短く美しく数多くあることを最上の贅沢と思う。そこに朝顔の本意がある。その暮らしには「驕る」という考えは入り込めない。一瞬の美を愛でるのみの驕りである。

やはらかくとらはれの身や秋の蚊帳

暑い夏の盛りの頃ならば「やわらかく」とはいかない。諸肌脱いでもなおも暑苦しく、布団など目にしたり体に触れたりするだけでも鬱陶しく、添い寝などもってのほか、一人でいるのも疎ましく、蚊帳の中は網をかけられた護送車のようなもの。素通しとはいえ麻一枚の布も余計物である。外に出れば危害が及ぶ。だから蚊帳の中は安全地帯のはずだが、安全と引き換えにすっぽり覆われる暑苦しさに甘んじなければならない。だが、暦の上で立秋ともなると、朝晩は幾分涼しくなる。どこからか秋風が吹き、蚊帳の裾を波立たせる。ササッーと寄せて返す

きぬ擦れに似た風の気配に人恋しささえ募る。蚊帳の居心地が変わって感じられる。一人より二人がよい。少し心が弾む。緩やかに束縛された不自由さが官能を刺激する。清潔なエロチズムが漂う艶なる風情である。物語めいた設定を楽しむ余裕も出てくる。しかし、これは作者名が鑑賞を左右するというやっかいな句である。

うろこ雲神の耕しかく細か

奈良は神々の国である。たくさんの由緒ある神社が点在する神話の国である。訪れる誰もが古代史のあれこれの場面を連想し、その中に紛れ込んだような幻想を抱く。折しも秋、田畑で働いている人影はあるいは古代の神々かもしれず、その末裔かもしれない、と思わせられる。「神の耕し」は奈良という土地柄からの発想として自然である。大地には秋耕の田畑、空を仰げば何とそこにも大地のつながりのように田畑が広がり、見事に耕されているではないかと目を見張る。空を覆い尽くしたうろこ雲を丹念な農作業の跡と見た。細やかに整然とうろこ雲が広がっている。人の手でなければこれほど細かく規則正しく空に雲を配置することはできないだろう、と思った瞬間、いやいや人では不可能、神の手であればこそこの見事なうろこ雲、何と言ってもここは神々の国だから、と思うにつけても自然界の美しく壮大な営みに感嘆したのである。うろこ雲を自然の仕業かとは誰も初めは目を疑う。人の周到な計画と丹精あってのあの規模の造形だと思う。大から小へわずかに変化を見せ、東から西へ緩やかに弧を描いて、空が丸いことをほのかに示す。奈良での旅吟であるが、大和奈良の昔むかしの空もこのように広がってあの歴史上の人々を感動させたことだろう。

口中はくれなゐならむ行々子

生き物の名前はその鳴き声からつけられることが多いという。葦切こと行々子はギョギョと聞こえるところからの命名のようである。葦切の名は葦などの生えている水辺に群棲し、葦を切り裂いて虫を食べるという習性からきている。ギョッギョッという擬声語は濁音が重なるために、自然界の音をおおむね好意的に聞き取る日本人の耳にもすぐには快適な音としては受け入れられない。それでも夏の水辺にそれらしく棲息しているところに季節のあわれを感じている。喉を痛めているように耳が捉える。時鳥ではないが激しい発声練習の後遺症のためか血を吐いてなお鳴いているかのように思ってしまう。そんなに鳴いては口の中は血がにじんで赤くなっているのではないか。労せずして出る声ならば口の中は涼しげな水色だろうにと思う。美声とは言えないものの鳴くという習性に忠実な鳥の性はあっぱれ、ギョッギョッという声の源の口中を痛々しい血の赤として視覚で捉えた。血のにじむ努力を評価し、同情し、葦切の声帯を思いやる。

三寒といへば不死男の獄中句

秋元不死男の句集『瘤』は「昭和十六年二月四日未明、俳句事件にて検挙され、横浜山手警察に留置さる」という前書のつく〈降る雪に胸を飾られて捕へらる〉に始まる。前書「夕方裁判所より帰れば飯凍えゐて箸通らず」、〈冬に負けじ割りてはくらふ獄の飯〉、前書「妻と面会わづかに数分なり」〈獄凍てぬ妻きてわれに禮をなす〉など百一句の後ようやく、「昭和十八年二月十日夜、迎へに来た妻とわが家に帰る」の前書で〈獄を出て觸れし枯木と聖き妻〉と詠む。後書きでは「わたしのうけた傷痕などは、まだ『瘤』程度のものにすぎない」と記している。この句集『瘤』をひもとく時、その弟子ならずとも襟を正し、黙せざるを得ない。極暑、極寒だけではない苛酷さの一部分をかいま見るのみで戦争の全容を後世が知ることは難しいが、俳句など文芸を通して無辜の庶民が受けた心身の打撃を思うにつけ、戦争の傷はしっかりと受け継がなければならないと思う。

さて、弟子である作者は「三寒」という言葉と季感から師の戦中と獄中を偲ぶ。句集『瘤』に三寒そのものを詠んだ句は見つからないが、弟子である作者は本人から獄中の「寒」体験を聞く機会があったかもしれない。どの季節を詠んだ句からも厳しさばかりが伝わってくるが、獄中句の六割強が冬の句であり、「寒し」は特に多く使われている。壁のように立ち塞がるものに怯える寒さである。俳句とは多くを語れない形であるとはいうものの季語「寒し」一つが実に多くを語る。ただし、季語の解釈などを含め、読者の努力なしに解釈鑑賞の幅を広げることはできない。

「行ちやん」とわれを呼びにし不死男の忌

功成り名を成した後の徳川家康が「昔は竹千代君と呼ばれたよ」と述懐したようなものである。読者は日ごろは忘れている鷹羽狩行の本名に触れて一瞬驚く。天下人が私的なそれも昔の個人情報をぽろりとこぼしたのであるから驚く。そしてすぐに「行ちゃんと呼ばれて愛されていたんだ」と知り、少し安心し、一歩近しい気持ちを抱く。漢字表記からは厳しいと感じる鷹羽狩行という名前を耳からはさほど厳しいとは感じない。さらにテレビ・ラジオなどメデアを通して知る人となり、その風貌がセットになるとむしろ涼やかな印象である。

お互いを何と呼び合うかによって間柄がわかる。先生と呼び、先生からはちゃん付けで呼ばれる。先生ともあろうものはむやみにそうは呼ばないが、気を許した集団では愛称が使われる。後に鳥の中でも獰猛な鷹を名乗ることになることは予告されていなっかたのだろう。その当時、最も本人らしい呼び名が「行ちやん」だったことがうかがえる。同時に呼ぶ側と呼ばれる側の親疎がうかがえる。その先生の命日に当たり、「行ちやん」と呼ばれたという事実に万感迫る。第三者は「藍より青し」と言い、出藍の誉れと評するだろうが、本人にとっては永久に先生である。この句がそれを証明している。秋元不死男は昭和五十二年七月二十五日七十五歳で没。

俳句観は著書『俳句入門』に詳らかである。

参考資料

・鷹羽狩行句集『十五峯』平成 19 年ふらんす堂刊
・蛇笏賞贈呈式会場にて配布のしおり（選評掲載）